新山協ニュース

新潟県山岳協会ホームページ http://niigata-ksk.sakura.ne.jp/00home/00home.html

会　長　森　庄一
TEL 0258-72-2710

事務局　佐藤　博
新潟市江南区亀田水道町1-1-31
TEL 025-381-8141

会報編集委員会代表
遠藤俊一
新潟市西区青山1-13-28
TEL 025-265-4181

第38回北信越国体を終えて

競技委員会

7月29～30日福井県立クライミングセンターにおいて第38回北信越国民体育大会が実施された。県内からは選手監督、審判のみならず次年度新潟開催ということもあり、視察団として多くの方が福井を訪れたため、たくさんの応援や激励をいただき、選手も大いに奮い立つことができた。

今回の報告はより詳細な報告ができるよう、各監督に原稿をお願いして作成した。

【成年女子】

成年女子監督　今井　浩二

5県中2県が本国体に出場する権利を得ることができる。昨年も同じ枠であったが単純な順位点での合計で1位のチームが3チームあったため、種目ごとの順位から3位となってしまい、片桐・瀧澤ペアとなって以来、本国体の出場権を逃してしまった。「昨年の雪辱を果たす」を合い言葉にトレーニングを重ね北信越大会に臨んだ。

どの県も選手強化に取り組んできているが、特に来年本国体の開催県である福井県は「別格」といえるほどの選手構成でこの大会に臨んできた。

地元出身で、小さい頃から北信越では別格のクライミング力を発揮してきた廣重に、廣重とワールドカップで一緒に戦っている尾上を加え万全の状態で大会に臨んできた。

その福井県を除くと4県中1県しか本国体に出場できないということで、昨年よりは「狭き門」という状況での大会であった。

初日はボルダリング競技、どちらかというと瀧澤が得意としている種目である。オブザベーションを終えた段階で、「ムーブの解読はそれほど難しくはないこと」、「完登までの試技数が勝敗を分けそうだ」という相談に至った。そこで試技数を一つでも減らせるよう、瀧澤が先に課題にチャレンジし、片桐がそれを見る。瀧澤が休んでいる間に片桐が次の課題に取り組み、それを瀧澤が観察するという流れで競技を進めた。

緊張する場面であったがさすがに組んでから長いペアだけあって必要なことを短時間で相談するなどスムーズに競技を進めることができた。

結果、8課題中6課題を完登し、8課題を完登した福井に次いで2位に付けた。

2日目はリード競技で屋外での戦いとなった。アイソレーションルームは昨日ボルダリングを行った部屋で、順番が来るとそこから外に出て競技を行うという流れであった。

新潟県は福井県の後の2番目スタート。コールゾーンでは福井県の選手への歓声や拍手が聞こえ、二人が完登を果たしたのを感じながら競技を行うこととなった。

新潟県はリードを得意とする片桐が1番手でスタートした。先に登った選手が後から登る選手にアドバイスできるからである。片桐は粘りのクライミングで着実に高度を稼ぎ、最後のルーフを超えたところまで到達した。

途中のホールドの悪さから考えるとかなり難しいルート設定であることが推察されたが粘りのクライミングでかなり高度を上げることができた。

瀧澤は核心部についてのアドバイスを片桐から短時間もらってからスタートした。やはりホールドはかなり悪く、きつそうであったがそれでも高度を稼ぎ最後のルーフに入ろうとするところまで高度を上げた。

あとは残りの3県の選手がどこまで高度を上げられるかで本国体に出場できるかどうかが決定することになった。

rt8w9hayh9

結果は完登した福井の２人が個人順位で１位２位、それに次ぐ３位４位を新潟県が獲得することができ、リード競技も２位となった。

その結果ボルダリングの結果とあわせて総合２位となり本国体の出場権を得て、昨年の雪辱を果たすことができた。

【少年男子】

少年男子監督　田中　勉

今年度、少年男子は、一人選手が代わり、新しいチームで臨んだ。田中選手は３年目で、経験、実力とも北信越№１であるのに対し、渡辺選手は実力的には他県を圧倒するものをもっているものの、初めての北信越大会という緊張と他県を圧倒する登りをしなくてはならないという、プレシャーも感じての競技だった。

監督の私から選手には、「国体の出場権を取ることだけに集中すること、そのためには、すごいパフォーマンスもかっこいい登りもいらない。集中し過ぎの凡ミスだけは、気をつけること」ということだけを伝えた。

１日目のボルダリングは、最終５番目のスタート、オプザベーションでムーブを読み切っていたので、不安なく、冷静にトライすることが出来、また、競技時間中の２人のコミュニケーションも抜群で、２人の合計８完登１０アテンプトと完璧に近い結果で、１位を獲得できた。

ボルダリングについては、結果以上にスタートポジション、ゴール保持等の不成立による無駄なアテンプトがなかったことで評価できると思っている。

２日目はリード、一発勝負のリードは一つのミスが結果に直結するので、何よりも冷静さが求められる。

リードの壁は、垂直とルーフを組合せたパターン壁で、最近の大会では珍しい形状だが、選手は、特別苦手意識も持たずにトライ出来たようだ。

スタート順１番の新潟県は、まず田中選手のトライ、下部垂壁のデリケートなパートと中段のルーフトラバースのパワフルなパートを淀みなくこなし、核心部へ、悪いムーブに多少てこずったが、核心後のレストから最上部へ、完登こそならなかったが、実力通りの登りをみせてくれた。

続く渡辺選手、田中選手の高度と核心部分のアドバイスを受けスタート。こちらも迷いない登りで、下部をこなし、ルーフトラバースは得意のボルダームーブでクリア。核心もあっさり越えて、もしや完登と期待させたが、田中選手の４手下でフォールした。

その後、他県の選手は、核心を越える選手がなく、新潟県は、個人順位、１位、２位でリードも１位を獲得した。

新潟県少年男子の結果をまとめると、ボルダリング１位、リード１位、各種目個人順位でも１位と２位で完全優勝という結果になった。

監督の立場から今回の大会で一番評価出来、褒めてやりたいことは、１位という結果より、凡ミスが一つもなかったことで、それを選手達が十分に分かっていたことと、２人のチームワークでカバーし合っていたことであった。

【少年女子】

少年女子監督　栗田　陽輔

少年女子は、今年中学３年生になって北信越国体初出場の栗田・江塚のペア。愛媛の本国体を目指して、関東合宿を重ねて北信越大会に挑んだ。

少年女子は本国体の枠は２県で、そのなかでも来年の本国体の開催県でかなり選手強化をしている福井県と去年の北信越大会１位の富山県がライバルと目されていた。

１日目のボルダリング競技は、栗田・江塚どちらもあまり得意でない種目だったが、課題のオプザベーションを終えた感じでは、栗田が４完登で江塚が１完登できそうだという話合いで競技が始まった。

新潟チームは１番手の登場だった。まず栗田が１課題目と２課題目を１トライで登り、続いて江塚が１課題目を登り始めた。予想以上に体の振られが大きく、体力の消耗が激しいので１課題目を諦め、２課題目に取り付くことにした。

２課題目はボーナスまで到達したものの完登までは届かなかった。監督としては江塚に早めに１課題目を止めさせ２課題目に集中させてやればよかったのではと悔やまれた。

休憩後の３課題目と４課題目は難しいセッティングで、他県も含めてほとんど完登ができなかった。唯一の完登は栗田の４課題目のみであった。

結果は８課題中３完登となって完登数では他県と並んでしまったが、２課題目に江塚が頑張って獲得したでボーナスのおかげで単独の１位となることができた。

２日目はリード競技で屋外の壁で行われた。リード競技

は４番手で時間にも余裕があり準備運動などしっかりとでき、万全の体制で挑むことができた。１番手の栗田はリードジャパンカップで２位になる実力者ということもあり、タイムも気にしつつ余裕の完登で２番手の江塚につなげた。江塚も下部は難なくこなし、粘りのクライミングで核心部分まで到達したところでフォール。富山県の二人が核心を超えかなりの高度まで登ったため、結果１位富山県で２位新潟県となった。

最終順位は１位が新潟県と富山県が同率で、この２県が本国体に出場することになった。栗田と江塚は北信越国体初出場初ペアで挑んだ大会としてはいい結果をのこせたと思う。本国体ではそれぞれ苦手なところを克服して決勝を目指してもらいたい。

（えひめ国体出場監督・選手）

第72回国民体育大会 山岳競技　出場監督・選手決定

【成年男子】
監督　竹井　康祐
選手　南雲　純太
選手　久貝　悠太

【成年女子】
監督　今井　浩二
選手　片桐　麻由子
選手　瀧澤　愉未

【少年男子】
監督　田中　勉
選手　田中　修太
選手　渡辺　颯海

【少年女子】
監督　栗田　陽輔
選手　栗田　湖有
選手　江塚　桜子

頑張れ！
愛媛国体上位入賞めざして
健闘を祈る!!

賛助会員御入会・御入金のお礼

次の皆様から、御入会、御入金を頂きました。（７月１日～８月31日）（あいうえお順）
佐藤博様、矢澤建三様　　御賛同ありがとうございました。

新潟県山岳協会　会長　森　庄一　　理事長　楡井利幸　　総務委員長　宮崎幸司

『新山協ニュース第331号』（平成29年７月発行）の「賛助会員御入会　御入金のお礼」のお名前を誤って記載いたしました。井手秀雄様を井出秀雄様に訂正させていただきます。お詫び申し上げます。

ALways Security OK
ALSOK
新潟綜合警備保障㈱
〒950－8633　新潟市東区小金町1－17－20
TEL 025－274－1965　FAX 025－271－3445

魚沼の里
www.uonuma-no-sato.co.jp

八海山
魚沼の酒
www.hakkaisan.co.jp

平成29年度岩登り講習・研修会報告

指導技術委員長　堀口寿彦

一．岩登り講習・研修課の概要

開催日
平成29年6月18日（日）
場　所
新発田市内倉ダム　杉滝岩
参加　6団体＋個人27名
（一般18名＋指導9名）

本年も杉滝岩にて、岩登り講習会を実施しました。

昨年度から本年度にかけては、クライミングが東京オリンピックの正式種目となり、日本山岳協会も「日本山岳・スポーツクライミング協会」と名称が変更され、取り巻く環境が大きく変化しています。当然世間の注目も高まっていますが、クライミングはいわゆる「スポーツクライミング」という呼び名が定着し、登山とは区別してみられる風潮も多くなっています。

このような状況の中で、本講習・研修会は依然として登山の一環としての岩登りを重要なテーマとしており、本年度も踏襲するものとて計画しています。

実施内容につきましては、技術委員会の皆さんと協議した結果、基本的には例年の内容に沿った形としますが、現在の指導委員会員メンバーでは3回目となりますので、これまでの反省を踏まえ若干の修正を行うものとしました。さらに指導体制も、相互研修の性格を強め一般参加予定の方からも一部指導側に廻ってもらいました。

①本講習は基本的にアルパインクライミングを中心とし、山岳地帯で実施することを前提とした登攀のシステム理解と技術習得を目的とする。

②参加者を主に経験から、A（リード経験者）、B（トップロープ・フォロー経験者）、C（初心者）の3クラスに分け指導する。

③ABCクラスとも、それぞれのレベルから次の段階経験をより積極的に体験できるようにする。

④安全確保に重点を置き、登山の一環として役立つものとし危険個所の通過にも役立つようにする。

二．講習会実施模様

①本年度の実施計画

昨年度はそれまでの講習・研修会の反省を踏まえ、Cクラスの導入場所として駐車場を利用しました。駐車場は依然にも使用されていたことがあり、それを再導入したものです。

この場所を利用する問題の一つは、既存のビレイポイントが無いことでずが、それはあらかじめ、懸垂下降のための支点を十分安全性を確保した上で、事前に設置しておくことで改善し、今回もそれに準じたものです。支点の設置に当たっては、自然の樹木を利用し、3カ所の支点からの流動分散とし、さらにそれを固定して設置しました。

もう一つの改善点は、ABC各班の使用する場所と移動をより明確にしたことです。

杉滝岩の斜面は便宜上入口側をAフェース、中間をBフェース、奥側をCフェースと呼び、それに駐車場斜面を加えて練習場としています。それらを使用し各班が移動しつつ講習・研修を実施することは以前と同様ですが、本年度はそれをさらに明確にしました。

（自己確保、懸垂下降指導）

登山・ハイキング・クライミング
テレマーク&山スキー
パーマーク
Mountain & Outdoor Parr Mark
長岡市西宮内2-97（長岡市役所裏通り）
TEL0258(37)1200・FAX0258(33)1164
●営業時間/AM10:30～PM8:00水曜定休
http://www.parrmark.co.jp

登山・スキーの専門店
ヒトと地球のインターフェイス
ICI石井スポーツ
新潟店・長岡店
新潟店　新潟市中央区堀之内南1丁目16-52　TEL(025)241-5134㈹
営業時間／10:00～19:00
長岡店　長岡市古正寺町110　TEL(0258)89-6901
営業時間／11:00～20:00（火曜定休日）

その概要は左記の通りです。

	A班	B班	C班
1．システムの理解と基礎技術	**岩場Aフェース** システムの確認 現地実施、懸垂下降等	**岩場Cフェース** システムの確認、懸垂下降等、セカンドクライミング、確保	**駐車場** 道具・システムの理解 懸垂下降、結び方
2．クライミングの実践	**岩場Bフェース** リード、フォロー交互練習 岩場、高難度部含む 確保後自己脱出等	**岩場Aフェース** リード、フォロー交互練習 リードの確保 支点の取り方	**岩場Cフェース** 懸垂下降、確保技術 セカンドクライミング 自己確保

本年度の改善点としましては、各班が時間によって実施地点を変え、他の班と重ならないことをより明確にしたことです。

さらに、今年度の目標としまして、各班でその時点でできるものから次のレベルに対してより実践的に体験することを挙げました。

②実施状況

実践に当たり、Aグループは、基本的な技術はすでに身につけていると考えられるため、昨年度と同様基本的には自由に活動し、いろいろなコースをトライしてもらいました。基本的にはマルチピッチのクライミングを中心に、本年度は、ルートを変え、より活発に活動してもらえたようです。Aグループには技術・体力は十分だが岩場の経験が少ない若者も加わっており、ベテランとの合同チームでかなり活発に動いてもらえたようです。

Bグループは毎年同様な傾向がありますが、各自のクライミング経験に最も大きな差があります。そのため、講習・研修内容をどうするかが悩ましいところですが、本年度は以下の2点を目標としました。

ⓐクライミングシステムの基本を安全確保の技術を中心に再確認すること。

ⓑ出来るだけリードに挑戦してもらうこと。

ⓐについては、Cフェースで懸垂下降とセカンド確保を中心に徹底するよう心掛けました。

Bグループでは基礎技術はやったが実際のルートの経験はほとんどない、または室内のクライミングのみで、ロープを使った岩場での経験が少ない方も含まれています。そのため、特にセカンド確保について明確に理解していない場合も多いように思われました。

今回セカンド確保については確保器と基礎的なムンターヒッチによるものに限定し、全員に体験していただきました。特に力を入れたのはムンターヒッチのような確保器具がない場合でも実践できるような手法に重点を置きました。

さらに、リード経験につきましてはAフェースを利用し、マルチピッチに挑戦してもらいました。例年はCフェースまたはAフェースの一部を利用した1ピッチのみの体験が多かったのですが、今年度は3チームに分け、全員がAフェースにて実施しました。

実際にやってみると部分的にはかなり厳しい状態もみられましたが、総合的にはよりよい体験ができたように思われます。

Cグループは初心者という設定であるため、まず安全に下降するためハーネスの装着・各ツールの使用法から懸垂下降を中心に実施しました。さらにCフェースでのクライミングにも挑戦してもらいました。ただ、この班はいわゆる初心者も多いため、懸垂下降などの基礎的技術の実施にかなり時間がかかる様子も見られました。

三．岩登りの今後について

かつての岩登りは迷うことなく、登山技術の一環と認識され、より困難なルートを克服するための、発展型として見られていました。その中で純粋にクライミング技術を追求する観点から各種のルート開拓が行われ、当初は日常練習の一環としての室内クライミングが、条件統一が容易で、難易度の違うルート自由に設置できることから、競技としてのスポーツクライミングに発展し、広く一般にも認識されるようになってきました。

これらの全体的流れについては、より選択肢が広がったとみることができ、良い方向にあるといえます。しかし、同時にクライミングへの参入契機が、スポーツクライミングジムからの直接参加も加わり、登山との関係自体を意識しない人も増えています。

それぞれが、独立した活動

を行っている場合は特に問題が生じませんが、山岳地域を活動の場とした場合は、周辺環境や気象等の条件により安全性が大きく左右されます。特にジムから参入した場合は、山岳地での安全確保が大きな課題となります。

また、登山の一環としての岩登りに関してですが、参加者のお話を聞く限り、意外に関心があるように思われます。したがって、現代は岩登りと称しても、各方面からの多様な参入が多く、より多彩なニーズが発生している状態といえます。

本講習・研修会はそのような条件の中で、登山の一環としての岩登りに特化し外の岩をマルチピッチで体験できる機会を提供する点で役立つと思われ、数少ない契機の一つを提供する役割があるのかもしれません。これまでも、講習・研修会の目的はほぼ一貫していますが、具体的な講習の進め方についてより研究する必要があるようです。

今回のその一つとして、リードを目標としより積極的に体験する方法を探ってみました。その結果、一定の成果は得られたと思いますが、さらに発展させるためには、安全性確保をどうするかといった現実的な問題も残されています。

このように課題はあるが、新潟県では杉滝岩という環境が、確実なプロテクションを含め、講習・トレーニング用ゲレンデとして存在することは、大きな財産と考えられます。

今回も無事に講習会を終了できたことに対し、岩場の整備を行い指導にもあたられている五十嵐さん、本講習会の開催に御協力いただいた県山協関係者及び参加者の皆様に感謝を申し上げます。

平成29年度 第1回安全登山講習会

遭難対策委員会　新保雅稔

7月8日（土）～9日（日）読図と危急時対策をテーマに安全登山講習会を県民休養地ビジターセンター、粟ケ岳中央ハイキング道を会場として開催しました。コンパスを用いた読図、搬送法、熱中症対策、スマートフォンの活用方法などについて講義や実技を実施、さらに新潟県警察山岳遭難救助隊長の玉木大二朗氏から遭難事例の実態とそれを教訓とした遭難対策について講演をいただくなど有意義な2日間となりました。暑い中ではありましたが26名の皆さんに参加いただきました。以下報告です。

読図についての講義は、概ねこれまで通りですが、コンパス利用のテクニックより、地図の正置による利用方法に重点を置いた内容としました。これは昨年度、新潟県開催の中高年登山指導者研修会（東日本地区）で、講師の村越真氏からの助言によるものです。

コンパスが上手に利用できても地図と実際の地形との関係が理解できていなければ、読図本来の目的を達成したことにならないというものです。また村越先生からはプレート型コンパスにこだわらなくてもよいのではないかとのご意見もいただきましたが、講習生の皆さんの中にはプレート型コンパスの使い方を学びたいという方も多くいらっしゃることから、コンパス利用についてはこれまで通りの内容で講習を行いました。

玉木大二朗氏からは警察庁発表の全国山岳遭難統計の傾向と新潟県における遭難事例の特徴などをお話しいただきました。

気温減率や水分摂取の方法など誤った知識から遭難に至る経過を具体的に教えていただき大変参考になりました。

搬送については、セルフレスキューとして、最小限必要な距離を安全に移動する方法について参加者の皆さん全員と実技を交えて意見交換を行いました。用具を用いない方法、ザックのみを用いる方法、ザックの他にスリング、雨具、ストックなどを併用する方法、ツェルト、ストック、ロープなどを利用した各種担架の利用など、一つ一つ作成実践

しそれぞれの搬送方法の特徴について考えていただきました。

その時の状況（負傷者の状態、救助者の人数と経験、天候や登山道の状況、搬送距離など）に応じてどの搬送法を利用するかの判断が重要だからです。玉木氏からは搬送用ネットの紹介がありました。

背負い搬送、担架搬送、ヘリコプター吊り上げなど多用途で機能的なものでしたが、ネットの構造や搬送方法について十分な知識と経験が必要と感じました。

ＧＰＳは機材価格が下がって、より求めやすくなってはきましたが、すべての登山者が身に付ける装備としてはまだまだ高価なものです。そこで普及率の高いスマートフォンの各種地図アプリについて講義と実践を行いました。一口に地図アプリと言っても機能や用途は様々です。

機能は「地図表示」、「ＧＰＳ機能」、「記録」の３つに大別でき、アプリの利用目的によってこれらの機能が組み合わされています。

今回はＹＡＭＡＰ（ヤマップ）を主題として各種地図の特徴と使い方について実際に利用し効果を確認しました。ただしＧＰＳ同様に電子機器のためバッテリー切れには十分注意し、予備バッテリー持参など対策を考える必要があります。

２日目は実際に登山道を歩きながら、地図の正置、等高線と実際の地形の比較、コンパスのバックベアリング利用などを行いながら実技を進めました。なお、その様子については参加者の寺尾さんのレポートにありますので割愛します。

下山後は、２日間を振り返っての復習を行った後、峡彩山岳会の楡井利幸氏からロープワークの必要性と準備について、実際の遭難事例をもとにして講義をいただきました。

参加された皆さんありがとうございました。講習会を通じて遭難事故防止の心構えが多くの登山者に伝われば幸いです。例年実施しておりますこの第１回安全登山講習会は２日間のプログラムで構成されています。１日のご参加でも十分ですが、２日間連続して参加することで、より理解も深まることかと思います。日程や内容についてご要望をお寄せください。

安全登山講習会に参加して

豊栄山岳会　寺尾　順治

新潟県山岳協会遭難対策委員会主催の「平成２９年度第１回安全登山講習会」に、初めて参加させていただきました。所属の会の月例会で要点を報告できる程度にしっかり勉強させていただこうと定年後の怠けた脳ミソに鞭を入れて臨みました。

地形図から立体地形をイメージしたり、コンパスを正確に使いこなして目的地の方角や現在地を確認する作業が道迷いを防ぎ、山岳遭難を防止することに繋がることを改めて認識し直すことができましたし、山岳遭難発生状況の統計だけでなく具体的な事例と対応も聴くことができ、登山届や道迷い防止のための事前準備の重要性を再認識することができました。

スマホで地形図やナビが利用できることも紹介され、便利な時代になったものだと感心します。

２日目は、各自が前日に作成したベアリング表を使いながら、ビジターセンターを起終点として長瀬神社からのハイキングコースを登り、粟ヶ岳中央登山道との合流点まで行って下る一周コースを歩きながら、チェックポイントごとに地図とコンパスを使って次の目的地や現在地の地点を割り出し確認していく作業の実地研修でした。

予め地形図上で測っておいた角度が実地での目的地点や現在地と合致することが確認でき、うれしくなりました。今後の山行でも是非活用したいものです。

ただ、途中で我が身にトラブルが発生したのです。気温が高く暑い日でしたが、長瀬神社を過ぎたころから汗が滝のように流れ尋常ではありません。いくら水分補給しても渇きは治まらず汗が噴き出て、そのうち足元に力が入らなくなりました。

チェックポイントの一つ東屋（３８７ｍ）での休憩で、立っているのも辛くなってきたので、少しじっとしていれば回復するかもとベンチに仰向けになりました。周囲の皆さんも私の異変に気付かれて

いて、声を掛けてくださるので、少し休めば大丈夫ですと返事をしたのですが、玉木さんの一声で、あれよあれよという間にシートに寝かせられる羽目になりました。

県警山岳遭難救助隊長の指示ですから、まな板の鯉状態となるしかなく、救助実習のモデルとなったのでした。シャツを脱いで上着をはだけ、扇いで風を送ります。靴を脱がされ、ザックで足を高くされ、首筋に冷たいボトルが当てられ、水分と塩分を補給され、腿の付け根も冷やされましたが、ズボンを脱ぐのだけは勘弁してもらいました。

前日、玉木さんの講義で教えられた第２段階の軽度熱中症の対応でした。体験して思ったのは、一生懸命扇いでくださったおかげで風が心地よく随分と症状が和らいだことです。この経験を今後に生かさなければなりません。

そんなことがあって、東屋から直接水源池に下ることになり、参加者の皆様には大変ご迷惑をお掛けしました。ビジターセンターに戻ると大分体調が回復し、昼食後のロープワークと搬送実技をしっかり受講することができました。

実は、初日終了後はビジターセンターに泊まったのですが、私以外は、玉木さんや県山協の講師や役員の方ばかりで緊張ましたが、久しぶりにかみさんに睨まれずに呑ませていただくことができ、しかも色々と為になるお話を伺うこともできて、楽しい時間を過ごすことができたのです。

このような交流の機会はなかなかないので、大変ありがたく、いい思い出になりました。というところまではよかったのですが、夜遅くまで呑みすぎての翌日は最初から脱水状態となってしまったのです。汗顔の至りとはこの事です。

講師、役員の方々そして参加者の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。熱中症の応急手当と救助実習は、全員合格ですね。

第64回弥彦山たいまつ登山祭に参加して

遠藤俊一

7月25日（火）、今年もまた、日本三大燈籠まつりのひとつ彌彦神社の燈籠神事に、当協会が協賛して昭和29年から実施してきた弥彦山たいまつ登山祭の日がやってきた。

いつもながらこの時期は、梅雨明け前後で天候が心配されるが、今年は気象台から梅雨明けが発表されず、連日ぐずついた空模様が続いていた。当日、午前中も時折激しい雨が降っていて、たいまつ登山祭の実施を危ぶみながら、弥彦へと向かった。ニュースでも、弥彦山スカイラインが土砂崩れで、全面的に交通止めと知らせていた。

14時30分から行われる第60回高頭祭に間に合うよう12時過ぎに麓を出発して、弥彦山登山道入り口に差し掛かるが、強い雨に見舞われた。弱い心がロープウエイ山麓駅へと僕を向かわせる。年を取ったなあと思いつつ、霧にけぶる景色を見ながら山頂駅へ。強く叩きつける雨に、雨合羽を身につけ、高頭祭会場の大平園地へ向かう。

高頭祭の行事開始のころから次第に小雨模様となり、天候が回復にしてきた。16時過ぎ、弥彦山御神廟へ向かう頃には雨も上がり、雲間から見える越後平野の青々とした水田がことのほか美しい。

17時御神廟前で、弥彦神社宮司による祝詞奏上、当協会森会長はじめ山岳団体関係者の玉串奉奠が行われ、安全登山を祈願した。丁度、雨上がりを待っていたかのように、ひぐらしがカナカナと鳴き始め、その甲高い声が夏の夕を演出してくれた。

続いて、「２０２０年東京オリンピックと協会名変更に

ついて」と題して、日本山岳・スポーツクライミング協会八木原圀明会長から山頂記念講演があった。

八木原会長は「スポーツクライミングは山登りではないという考えが根強くあるが、若者の間にアッツという間に広がった。これは岩登りが進化したもの、根っこは同じととらえて、こうした時代を理解していかなければならない。若者に支持されているサーフィン、スケートボード、スポーツクライミングが東京オリンピックの競技種目となった。高齢化が進む山岳界はいつまでもつのかという喫緊の課題に応えるためにも、若者を取り込んでいかなければならない。そのためにも、「日本山岳協会」を「日本山岳・スポーツクライミング協会」に変える事が重要であった。「日本体育協会」もいずれ「日本スポーツ協会」に変更となるだろう。カタカナ語排除は昔のこと。丁度、時代の変革期にあると思う。この時代に生きている我々、時代の移り変わりをしっかりと見てゆきたい。」とユーモアを交えながら語られた。

講演終了後の18時20分、雨の心配も払しょくされ、弥彦山岳会のご苦労によって作られたたいまつを持って、およそ140名の県下の岳人たちが下山開始。夜のとばりが下り始めた5合目付近で、たいまつに点火。燃え盛る炎に照らし出されるたいまつの行列は、暗闇の山中を竜が下るが如く、火が流れ、うねり、神秘的であった。

登山道を下りたところで、たいまつを交換し、ボーイスカートの鼓笛隊に先導されて彌彦神社へ向かう。神社御神前に整列、二礼四拍手一礼でお参り、権宮司からの歓迎の挨拶に続き、弥彦山岳会小林会長の音頭による彌彦神社万歳三唱が行われた。

その後、鼓笛隊が先導して、参道から弥彦駅へフィナーレの行進を開始した。いつもながら沿道で歓迎してくれている多くの住民の皆さんとハイタッチをしたり、手を振ったりしながらの楽しい行進であった。

20時21分、弥彦駅前に到着し、たいまつを納め解散。希望者は近くの「ヤホール」にて、祝杯を挙げ、今日の一日を語らった。

末尾となりましたが、いつもこの行事の設営を担っていただいている弥彦山岳会の皆様に感謝申し上げます。

毎年7月25日にこの行事は開催されます。本協会の主要の行事の一つです。

参加されてはいかがでしょうか。

平成29年5月第330号続編

藤島　玄 著

冬山覚書 9

（新潟県山岳協会1961）

● 初冬のドカ雪の悪さを知っているか。見掛けは白一面でも、下の藪は網の目状に夏と同じく立っている。何のことはないスキーで藪こぎ、雪みどろの悪戦苦闘でも斜面は登られまい。コースは絶体頂稜を離れるべからず。灌木の幹ならスキーで藪漕ぎもできる。細木、小枝の藪は敬遠するか、日本刀で伐開するかだ。どうだ、やってみたら。

○ 一晩に一米前後も降る馬鹿雪のこなし方を知っているか。スキーも輪樏も殆ど効果がないから始末が悪いぞ。木鋤でパッパと跳ねたほうが早い。待てば海路の日和だ。半日で二〇糎も沈下して落着いたら行動をおこすこった。

● ラッセルは左スキーの先端と、右脚の膝頭が平行になるまでの大股で登られるか。汗を流さず、息を切らず、ゆっくり、たゆみなく、大きくターンを切って。高度差一〇〇〇米くらいは連続一人でやられるか。日帰りスキーなど頼んでも願ってもやってみれ。単独行を思って行動しなければならないことを知っているか。

○ キックターンは山廻りが必定。登られる限りの急斜面は総て山廻りで能率をあげて当たりまえ。沢など、極度に狭い場所以外の谷廻りは、その都度三歩ずつ損してパーテーを乱す。二度とやったら蹴落し、でんぐり返してやれ。

● 確実な半制動、停止、廻転を、荷を担いで度胸よくできるか。スピードはあるに越したことはないが、制御できる速度の範囲内に制動しておかぬと危険である。半制動で谷側へ体重を傾ければ、ひとりでに廻転することぐらいは知っているか。無理はいらない。ゆっくり自然でよい。

【新潟県山岳協会70周年記念　海外登山講演会】

重廣恒夫がヒマラヤを語る

１．日　時：平成29年10月28日（土）　13：00　～　17：00

２．会　場：新潟市万代市民会館　６階 多目的ホール（新潟駅より徒歩７分）
　　新潟市中央区東万代町９－１　　TEL：025-246-7711

３．内　容：講演Ⅰ　重廣恒夫氏　（公益社団法人 日本山岳会副会長）
　　演題：重廣恒夫のヒマラヤ登山塾　＜ヒマラヤ登山15回の経験から＞
　　講演Ⅱ　橋本しをり氏（医学博士、国際認定山岳医、日本山岳会会員）
　　演題：ヒマラヤ高所順応レクチャー　＜高山病対処法＞

４．参加資料代：一般　1,000円　　学生・生徒　500円

５．申込方法：加盟山岳団体へ申し込みください。
　　一般の方は下記へ
　　E-mail：niigatakaigaitozan@gmail.com
　　電話：仁部哲雄（TEL：025-231-6774）
　　小山一夫（TEL/FAX：025-265-4417）

６．申込締切：10月20日（金）　　以上

今後の行事予定

平成29年10月１～３日	第72回国民体育大会山岳競技　愛媛県西条市
平成29年10月14～15日	第66回自然保護研修会・親睦登山　出湯自然養生園
平成29年10月28日	創立70周年記念海外登山講演会　新潟市万代市民会館
平成29年10月29日	第２回安全登山講習会研修会・救急法講習会　会場未定
平成30年１月27日	創立70周年記念式典・新年会　長岡市　会場未定

編集後記

○７月25日に開催の山の日協賛記念行事、第64回弥彦山たいまつ登山祭に今年も参加してきた。

○懸念された雨もすっかり上がり、今年も、ひぐらしがカナカナとさわやかな鳴き声を聞かせてくれた。梅雨明けはまだ宣言されていないが、夏が来たと実感する。

○彌彦神社のお祭りと合わせて実施されているので、神輿が町を練り歩いたり、たいまつ行進と同時進行で花火が次から次へと打ちあがり、住民と一体となった賑やかなたいまつ登山祭が繰り広げられる。

○かつては、県下の岳人たち３００余名が参集し、たいまつが足りなかったこともあったという。往時の賑わいを再びと願う。